

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■ 第5章「命」

10

3月15日早朝、東京電力福島第一

原発免震重要棟から約50人の社

員が退避した。保安班副班長の林田

敏幸(43)は免震棟十階で最後の1人

を見送り、出入り口の二重扉を閉め

た。2階の緊急時対策本部には少な

くとも69人が残った。

林田は対策本部に戻ると、まずバ

ンコソで妻にメールを打った。

「あとよろしくお願ひします」

たった1行だけ。もう妻には会え

ない、と思ったが、それ以上、言葉

が出てこなかった。

林田は正門付近の放射線量をモニ

ターカーで計測している班員2人に

無線で連絡を取った。この人を加

えると構内にはこの時、最低でも7

## 最後の食事

人がいたことになる。

「もうすぐ線量が上がったら逃

げよう」

せめてこの人だけでも生き残っ

てほしい。そんな気持ちだった。

一方、所長の吉田昌郎(56)は対策

本部をめぐり歩き回っていた。1

人一人の顔を目に焼き付けているよ

うだった。

吉田は自衛消防隊副隊長の新井知

行(42)の前で立ち止まり、頭を手に

置いた。穏やかな表情で「なぞく吉

田の目は「残らせて悪かったな」と

言っていた。

吉田は対策本部を1周し終わる

と部下たちに向かっていた。この時

「からんとちゃったな。おま

## 味を感じない缶詰

その「好きなし」といふや

張りを詰めていた雰囲気がある

だ。

「腹減ったな」

吹っ切れた様子で吉田が言った。

第1原発に入った作業員たちからの

頭の足元の段ボール箱には、応援で

た。社内で大食漢として知られる国

第2発電班長の国頭晋(48)が応じ

「菓子ならここにありますよ」

あつたからだ。

に制限されていた。非常食に限りが

肉の大和煮やフルーツの缶詰が入っ

た。林田も2階の非常用物品庫から半

クラッカーの小袋1袋と、2人で分

た。その前に菓子袋を配って歩いた。

差し入れが入っていた。国頭は同様



(上から)蒸初水、最シタ、デジタ機、機42と2日(17年3月3日提供)の衛星写真。原第1原発の建屋上部が崩壊した。1号機は2011年3月17日に爆発した。1号機は2011年3月17日に爆発した。1号機は2011年3月17日に爆発した。

「私はこちらの方が好きですよ」

缶詰を手に持ちながら「1号機

中央制御室の当直長伊藤郁夫(52)が

返した。

「吉田さん、本当にタマですわ」

「あたためた」

2人は笑ってきえた。

林田も自席に戻り、大和煮の缶詰

を開けた。口に運んでみたが、何の

味もしなかった。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同

通信 高橋秀樹)